

文学的空間としてのニューオリンズ ～観光植民地化と文学作品～

田中敬子

ニューオリンズは現在のアメリカでも独特の雰囲気を持った歴史的観光都市として栄えているが、19世紀からすでにその特殊性は明らかであった。この街の歴史的変遷や人種の混合のドラマ性、絵画的なたたずまいによって、ニューオリンズはしばしば文学作品の舞台になり、また時には芸術家集団が形成される場ともなった。しかし複数の異文化が入り交じった地方色豊かな街として規定されたイメージがニューオリンズを拘束することも事実である。この街の観光的、文学的市場価値を作家がどのように利用し、もしくは越えようとしたか、さらにはニューオリンズの新たな魅力を発見しつつその伝説化に貢献したかを考察することにより、ニューオリンズの文学空間としての意味を探る。これは多数派優勢の全国的状況のなかで少数民族文化や地方文化の持続をはかる際に生じる問題を、地方都市ニューオリンズに応用して考えることでもある。しかしニューオリンズは単に少数民族文化を保持して売り物にする博物館や市場ではない。ニューオリンズが資本主義、帝国主義を代表することもあり、国内、汎アメリカ大陸双方の領域でニューオリンズは中心と周縁の両方の機能を果たしうる。本論では二十世紀初めまでに確立したニューオリンズのイメージを概観し、それをもとに二十世紀前半および第二次世界大戦後に活躍した二人の南部作家、ウィリアム・フォークナーとテネシー・ウィリアムズの描くニューオリンズ像を分析する。二人はアメリカ合衆国にあっては南部という後進地域に属し、一方南部社会の中では白人男性という点で優位にある点では共通している。少なくとも表面上保守派のフォークナーと既成道徳からはみ出したウィリアムズの二人がそれぞれニューオリンズをどう扱っているか検討し、地方文化の植民地化と文学作品の関係を探る。

ニューオリンズの歴史をおさらいしておくと、1682年ラサールがミシシッピ川流域を探検し、フランス領としてルイジアナを命名してのち、1723年にはニューオリンズがルイジアナの州都となっている。しかし1762年にはフォンテーヌブロー条約協定によりこの地はスペインに譲渡された。その後二度の大火が町を襲い、再建された建物はスペイン風の様式が多くなった。それでもニューオリンズは1800年には再びフランス領となる。しかしナポレオンは1803年広大なルイジアナをアメリカに売却してしまう。フランスがルイジアナを手放したのは、フランス革命以降の混乱や、当時の世界各地の植民地の一般的な独立の気運の高まりによって、広大な海外領地を効率よく管理することができなくなったことが理由とされる。さらに具体的にはフランスのカリブ海の植民地、サン・ドミンゴ（後のハイチ）が独立のための戦いを優位に進めており、ナポレオンは敗北を見越してサン・ドミンゴの食糧供給基地となっていたルイジアナを売却した、ともいわれる（ファッグ 117-123）。このようにニューオリンズは、アメリカ合衆国に属するまでに、フラ

ンスやスペインのラテン文化、及びカリブ海地域の影響を強く受けていた。

この町がアメリカ領となつてからは、1812年から始まった英国との戦争で1815年、アンドルー・ジャクソン率いるアメリカ軍がニューオリンズの戦いで決定的な勝利を納める。その後大統領となつたジャクソンのもと、アメリカ人は土地を求めて西進運動がすさまじく、それを「明白な運命」と信じる。ミシシッピ川には蒸気船が行き交い、ニューオリンズの中心の広場はジャクソン広場と改名され、ニューオリンズは南北戦争勃発まで、南部を代表する貿易港として繁栄した。南北戦争後はニューオリンズに戦前のような栄光は戻らず、鉄道輸送の発展によって、ミシシッピ川流域の港という地理的優位も多少薄れる。しかし雑多な人種が混じり合い異国情緒に満ちた町としての特殊性はむしろ強調されるようになる。特に1898年から1917年はストーリーヴィル地域の公認売春が売り物となつて、ニューオリンズの性的放縦さが喧伝された。

このようにラテン文化の香り、カリブ植民地文化との親近性、名門クレオール伝統、黒人奴隷や混血人種、新参者のアメリカ人など、ニューオリンズの複雑な魅力は作家にとって格好の題材を提供してくれる。ニューオリンズが文学作品の舞台背景によく登場するようになったのは南北戦争後、いわゆる地方文学が盛んになってからである。しかしニューオリンズのイメージはそれまでの歴史を通じて原型がすでにできあがっており、この町を文学作品の舞台にした人々はその原型を十分利用している。この地を自分たちの題材として特権化して考えがちであった南北戦争後のニューオリンズゆかりの作家たちを別にして、20世紀初頭までにアメリカ合衆国全体としてニューオリンズが一般にどのような文学的イメージを獲得していたのか、二つの例からまず確認しておこう。

1

19世紀を通じてニューオリンズを印象づける作品のひとつとして思い浮かぶのはストーリー夫人の『アンクル・トムの小屋』(1852)にでてくるニューオリンズであろう。奴隷に対する扱いがまだ寛容であると思われているケンタッキー州から売られてニューオリンズにきたトムは、川を下る蒸気船に乗り合わせたセント・クレア親子に買い取られ、天使のような令嬢エヴァとその父オーガスト・セント・クレアの信頼を得てまずは穏やかな暮らしを経験する。セント・クレアは母がカナダ出身のユグノー教徒であり、カトリック文化とは違うが、ニューオリンズでは裕福なクレオールとして通っている。だが相次ぐエヴァやセント・クレアの死後、トムはセント・クレアの冷淡でわがままな妻によって売りに出され、奴隷市場に立たされたあげく残忍な新しい主人リグレーについて郊外の農場にゆき、虐待を受け続けて死ぬ。

『アンクル・トムの小屋』でのニューオリンズは南部奴隷制の問題を体現している。情け深い主人に仕えることができれば奴隷の境遇は少しはましであるが、主人の気まぐれや経済状況の変化によって奴隷の運は一変する。クレオールの洗練された文化と豪奢、プランテーション社会の階級制、奴隷市場の人間を売買する冷酷さ、奴隷への暴力がニューオリンズを代表するものとなっている。

ストーリー夫人が描くニューオリンズが、南北戦争前の北部が抱くこの町のイメージを代表してい

たとすれば、世紀が変わって20世紀の初頭、アメリカ民主主義の代表詩人といわれるホイットマンのニューオリンズ滞在を巡る議論が、ニューオリンズのもう一つのイメージの典型を語っている。ホイットマン全集が刊行され、彼の伝記が次々と発表されたこの時期、彼の1848年のニューオリンズ行きが一つのミステリーとされた。ニューヨークで政治的論争に巻き込まれてジャーナリストとしての職を辞した彼は、弟とともにニューオリンズへ行き、そこの新聞『クレセント』で働く。しかし病弱な弟がニューオリンズの夏、特に黄熱病の犠牲になることを恐れて、ホイットマンは半年もたたずに北部へ帰る（レイノルズ122）。しかしこのニューオリンズ滞在についてはホイットマン自身が曖昧にしていたこともあり、^(注1) 20世紀初頭の伝記作者たちは想像をたくましくした。ゲイ・ウィルソン・アレンによれば、ビンズによるクレオール名家出身の女性とのロマンス説（1905年）を皮切りに、バザルゲット（1908年）やド・セリンクル（1914年）らがそれを支持し、さらにはホロウェーの、ロマンスの相手は女ではなく男であったとはのめかす説（1921年）もあった（アレン21-22、28-29、30-31、34-35）。現在ではホイットマンのニューオリンズ滞在にそのようなセンセーショナルな要素はほとんど見いだされていないが（レイノルズ121）、1892年の彼の死後、総合評価が初めて行われた20世紀初頭には、『草の葉』の初版出版前の彼の人生の一大事があった場所としてニューオリンズ滞在が取り沙汰された。

ホイットマンの伝記作者たちにしてみれば、性について初めてあからさまに歌った詩人の生涯にロマンスを探したいのは当然であったろう。しかしそれにニューオリンズが選ばれ、しかも相手が名門クレオール女性であったり、はたまた男性であったりするの、やはり当時のニューオリンズの一般的イメージに影響されたといわざるを得ない。すでに1880年代から1890年代にかけて流行した地方文学によってニューオリンズのクレオール社会は有名であったし、ホロウェーのホモセクシュアル説のでた1921年は、公認売春がニューオリンズで廃止されて四年しかたっていない。

ホイットマンはニューヨークでは奴隷制反対の論陣を張ることもできたが、1848年、奴隷制の牙城ニューオリンズではさすがに正面切って論争を挑むことができなかった。この地に滞在中、彼が働いていた新聞に寄せた記事は、紀行文やニューオリンズについての雑文のみである。伝記作者たちは、のちにアメリカを代表する詩人が南部奴隷制のまっただ中であって何もいえなかった事実に感じる鬱屈した思いをロマンスの発明によって解消した、と考えるのは穿ちすぎだろうか。ニューオリンズ滞在を彼の性体験と結びつけたがる伝記作者たちは、この町の異国情緒、セクシュアリティ、階級性、もしくはホモセクシュアルという、社会の中のマイナーな要素を強調し、アメリカ民主主義の代表的男性詩人がそれを自らの文学的成長の肥やしにしたエピソードに仕立て上げる。ニューオリンズはホイットマンに十分な性体験を与えた土地として、彼が秘めた恋とともに北部に帰って詩人として成長した、という神話化に貢献する。

このように20世紀初頭までのニューオリンズの一般的イメージは、南北戦争以前の奴隷市場の冷酷さと暴力の記憶をとどめる一方、南部荘園社会やクレオールの洗練と優雅の伝統、階級性、港町の性的放縦や無秩序、異国情緒などが入り交じっている。このことに地方文学流行時代の

ジョージ・ワシントン・ケーブルやグレイス・キング、ケイト・ショパンなどが描くニューオリンズが貢献したのは事実だが、『アンクル・トムの小屋』が示すように、ニューオリンズの原型イメージはすでに南北戦争以前にできあがっている。そして南北戦争後は、北部の理性、近代性に対し南部の感情、暴力性、封建制がより強調され、敗北して優雅にひれ伏す南部と、理性で抑制しきれない心の葛藤や罪意識を性や人種の問題として具体化している南部、という両方のイメージが定着した。南北戦争後のニューオリンズは商業面で衰退したが、地方色で有望だったこの地は、南部についてのこれらのイメージを観光にも文学にも利用してきた。

ルイス・P・シンプソンは「文学的中核としてのニューオリンズ——その諸問題」というエッセイの中で、南北戦争後のニューオリンズ文学が旧南部を売り物にする「地方色症候群」(local-color syndrome 81)を示し、全国的な観光産業や文学産業の中でルイジアナの文学植民地化に貢献してしまった、と指摘している(83)。確かにトマス・リチャードソンが「ルイジアナの地方色」で述べているように(199-200)、人種や階級、文化など歴史的に様々な対立関係に富むニューオリンズは文学にとって格好の材料となる。しかもシンプソン(80)やリチャードソン(199-200)が指摘するように、南北戦争後の近代化が進んだ社会では、近代化から取り残されたような地方都市の独自の文化はそれだけで没個性的な大衆社会の中で珍重されるきらいがある。ケーブルが一見大衆好みのクレオール族の物語に人種差別社会の問題を描き、またグレイス・キングがケーブルの人種差別主義批判に反発し、真のニューオリンズの良さを描こうとしたように(ブッシュ 10-11)、地方文学で活躍した作家たちはニューオリンズを観光的に利用する意図は持っていなかったであろう。しかし良心的であっても彼らは結果としてニューオリンズの紋切り型のイメージ増進に貢献してしまい、「文学植民地化」を止められない実態が残る。

よってニューオリンズを題材に選ぶことに作家は細心の注意が必要である。地方文学流行時代にやはり作家となっていたヘンリー・ジェイムズは、『ホーソン』(1879年)と題したエッセイで、ヨーロッパと比べてアメリカには小説をはぐくむ土壌は何もない、作家が題材にしたいような歴史も成熟した社会も皆無である、と不満を述べている(34-35)。それならばヨーロッパの影響を長く受けたニューオリンズをジェイムズは意識しなかったのか、気になるところだが、彼は1881年出版した『ワシントン広場』でわずかにニューオリンズに言及している。1880年ケーブルは、南北戦争以前の華やかなクレオール社会を題材にした小説『グランディッシュ一族』を出版しているが、『ワシントン広場』で使われるニューオリンズにはジェイムズの見事な皮肉が効いている。

この小説で裕福な医師の娘キャサリンと結婚することで逆玉の輿をねらう青年モリス・タウンゼントは、キャサリンの父に反対され、彼女が父の遺産をもらえなくなることを知って彼女を捨てる。このとき彼女の元を去るのに彼が用いる口実は、綿花の買い付けのためにニューオリンズに行かなければならない、ということである。それにたいしキャサリンは彼が逃げだそうとしていることを直感的に悟り、黄熱病の危険がいっぱいのニューオリンズなどへ彼をやりたくないという(247)。この小説の時代背景は南北戦争以前のニューヨークで、ニューオリンズがニューヨークと同じくらい港として栄えて国際貿易港としての野心を燃やしていた頃であり、モリスが

商用でニューオリンズへ行くというのはおかしいことではない。しかしこの小説が出版された1881年は南部再建時代がやっと始まったばかりでニューオリンズに昔の繁栄はなく、この町が商業大都市の夢を断たれて旧南部の優雅な社会の幻想を売り物にしていたときである。その時点でこの小説を読む読者は、今まで甘い恋をささやきながら実は計算高いモリスが、ニューオリンズでの綿花買い付けの商用を口実にキャサリンを捨てようとする事態に出会って、言い逃れのだしに使われるニューオリンズの胡散臭さをたっぷり味あえる。さらに恋人を去らせたくないキャサリンが、黄熱病が蔓延する町、という野蛮な未開の土地のイメージでニューオリンズをとらえるのも、洗練された異国情緒が売り物の町に対する見事なジャブである。地方文学がもてはやされた時代にあってジェイムズはそのステレオタイプのニューオリンズのイメージと現実を逆転させて効果的に使う、という高度に洗練された作家としての腕前を披露している。

2

ニューオリンズは19世紀末の地方文学の流行にのった後、1920年代前半に再び文学的に活発な時期を迎える。当時モダニズムの台頭とともに小規模な文芸雑誌が盛んになったが、ニューオリンズでも『ダブル・ディーラー』という雑誌が1921年から1926年にかけて発行された。この雑誌の発行は一つには他の文芸雑誌に刺激されてということであるが、もう一つにはH.L.メンケンが雑誌『スマート・セット』で1917年、南部には芸術など皆無である、と毒づいた（メンケン136）ことに対する反発があった。『ハーバーズ』や『スクリブナーズ』などの商業雑誌の小市民性を嘲笑し、『ダイアル』や『イェール・レビュー』といった芸術性の高い雑誌に肩を並べようという編集者たちの高い理想（第1巻3号、82-83）はある程度実を結んだ。寄稿者にはアーサー・シモンズを始めシャーウッド・アンダソン、アレン・テイト、ハート・クレイン、ロバート・ベン・ワレン、エイミー・ローウェルらがあり、まだ無名のウィリアム・フォークナーとアーネスト・ヘミングウェイの詩が同時に掲載されたこともあった。ブルーノ・タウトのエッセイものったことがある。

しかし『ダブル・ディーラー』には、マックス・ブッツェルが指摘するように、ラフカディオ・ハーンも象徴主義もダダイズムも同等に扱う雑ばくさがあった（18-19）。論説で南部文学の感傷性、偏狭性を排し、ケーブルの描くクレオール社会はもう存在しないことを強調するが（第1巻6号214-16）、一方でアンダソンのエッセイ「ニューオリンズ、ダブル・ディーラー、そしてアメリカのモダン・ムーヴメント」掲載が示すように、ニューオリンズの特色を最大限評価したい心情が伺える。『ダブル・ディーラー』発行当時、ニューオリンズにはこのアンダソンや『ダブル・ディーラー』に出入りする連中を中心に芸術家集団があり、ヨーロッパ旅行前後のウィリアム・フォークナーも一時その中にいた。次にフォークナーの例を挙げてアンダソンと対比させながら、ニューオリンズという文学空間を彼がどう考えていたか、検討する。

アンダソンは1922年『ダブル・ディーラー』の第3巻15号に「ニューオリンズ、ダブル・ディーラー、そしてアメリカのモダン・ムーヴメント」というエッセイを書き、現代の機械文明によって均一化してしまったアメリカの中で、ニューオリンズのように歴史的な文化を残している地方

都市にこそ、新しい文学をはぐくむ環境があると述べる（119、125-26）。アンダソンは中西部にいた時から常に機械化、大量生産による無機質な近代社会に危惧を感じて自作で警告を発しており、彼がニューオリンズのように独自の文化を残している町に近代化社会に対する抵抗の砦を見ようとするのはうなずける。ニューオリンズで彼と知り合ったフォークナーはまだ無名の青年であったが、アンダソンから自分をもっとよく知っている場所について書くように、という忠告を受けている（プロットナー415）。それまでフランス象徴詩や世紀末芸術にも関心を寄せていたフォークナーが、ニューオリンズ時代を経た後は故郷を舞台とした一連の小説によって大作家に成長していくことを考えると、アンダソンの忠告は正しかったことになる。

しかしニューオリンズでフォークナーは必ずしもアンダソンに全面的に敬服していたわけではない。アンダソンは1924年に書いた「南部との出会い」（1925年『ダイアル』誌発表）というスケッチでフォークナーをモデルにしたデヴィッドという青年を登場させている。ニューオリンズにやってきたデヴィッドは常に酒を飲み、それは第一次世界大戦で頭に負傷してその傷が痛むのを紛らわせるためなのだ、と語り手アンダソンに説明する。南部の荘園屋敷出身だ、という彼を語り手は元の売春宿経営者である陽気で貫禄ある女性のところに伴い、彼女のところでデヴィッドはリラックスして眠った、というだけの軽い内容だが、題名が示すとおり、フォークナーはある印象的な南部人としてとらえられている。アンダソンはこのスケッチを、人生経験豊かな元売春宿の女将が戦争後遺症に悩む南部上流階級出身の風来坊の青年の心をひととき癒す話に仕立て上げている。それは機械文明の申し子のような戦争による負傷に苦しむ、落ち目の南部上流階級の青年の救済に、ニューオリンズの性的寛容さと母性的安心感を用いるという、少々収まりの良すぎる話である。しかし実際はフォークナーの第一次大戦での負傷は彼がよく好んだ作り話であり、南部荘園屋敷出身というのも、フォークナーがそういったとすれば少々誇張である。フォークナーがとったお得意の戦争帰りのポーズをアンダソンがどこまで本気にして作品の材料としたのか不明だが、アンダソンが最終的に話を手際よくまとめて満足したらしいことは伺える。

フォークナーとしては、戦争に参加しなかった自分の複雑なコンプレックスから生じる演技を真に受け（少なくとも刺激を受け）、ニューオリンズの人生模様の一断片として提示する話を書くアンダソンのナイーブさにある種の失望を覚えたのではないか。^{註2）}二人の作家の間で具体的に何があったのか定かではない。ともかく1927年、フォークナーはニューオリンズでともにアパート暮らしをしていた建築家ビル・スプラトリングの『シャード・アンダソンと他の有名なクレオールたち』というイラスト画集に序文を書き、アンダソンの文体をまねてやんわりと揶揄している。

フォークナーにとって、アンダソンが地方都市や故郷の村落共同体を機械文明に対抗するものとして賛美する傾向は、地方文学につながる警戒すべきものである。確かにフォークナーはアンダソンの忠告をいれて故郷に関心を戻した。また彼の最初の小説『兵士の報酬』（1926）の結末部で黒人教会の歌声が力強く響いて大地の生命力を連想させるのは、アンダソンが1925年に出版した小説『暗い笑い』でニューオリンズの黒人の生命力にあふれる笑いが書かれているのに影響を

受けたのであろう、ともいわれている。しかしその後フォークナーの黒人の描写は次第に、愚鈍で人の良い、または生命力にあふれて自然と共生できる、といったステレオタイプのなものではなくなってゆく。アンダソンは北部出身で転々と居場所を変えたが、南部出身で南部から逃れることはできないと感じていたフォークナーにとっては、現実の近代社会から取り残された骨董趣味の場としてニューオリンズを、または彼の故郷の町を描くことは自らの文学にとって致命的である。

フォークナーはニューオリンズ時代に『蚊』という二作目の小説を書いた。その小説の舞台背景はニューオリンズであるにもかかわらず、その大部分はヨット上の芸術家たちのおしゃべりで、ニューオリンズの町はプロローグとエピローグにでてくるだけである。登場する芸術家たちはアンダソンを始め、『ダブル・ディーラー』に寄稿する人々がモデルにされたといわれる。フォークナーはこの小説で話に夢中な芸術家たちを皮肉っていて、売春宿を除けばニューオリンズ売り物のクレオールもクワドルン・ボール（四分の一だけ黒人の血が混じった女性たちを白人男性が品定めして愛人に選ぶために開かれる舞踏会）もでてこない。ただひとつ、フォークナーが書き込んでいるのは、登場人物の一人、彫刻家のゴードンのアトリエが昔は奴隷が寝泊まりする部屋だった、ということである（14）。職業作家としてデビューしたばかりのフォークナーはこの小説で、芸術家と市場の関係を一つのテーマにしている。ゴードンは自分が彫った理想的な若い女性のトルソーを売りたいがらない。フォークナーは、心血を注いだ作品を市場に出さねばならない芸術家は、奴隷市場に出される人身売買の奴隷にも似て、魂の売買を余儀なくされると暗示している。ここでニューオリンズの町は文化よりむしろ、警戒すべき商業主義の代表と見なされている。

フォークナーは『蚊』のまえにニューオリンズに関するスケッチをいくつか描き、『ダブル・ディーラー』や土地の新聞『タイムズ・ピカユーン』に載せている。それらはニューオリンズの異国情緒と彼の実験的スタイルの試みが混じり合ったもので、売春婦や黒人、ユダヤ人など社会の底辺の人々に焦点が当てられている（『ニューオリンズスケッチ』参照）。そこではクレオール社会はでてこないが、確かにフォークナーもニューオリンズ独特の爛熟した雰囲気を利用してはいる。しかし芸術と市場を対比させた『蚊』以降、『標識塔』（1935）で近代都市ニューオリンズの商業主義が、また『野生の棕櫚』（1939）でこの街の小市民的暮らしが、それぞれ芸術家的生き方にあこがれる主人公と対比されるほかは、フォークナーのニューオリンズ利用は限られている。それはニューオリンズ、さらには南部の文学植民地化に作家として加担することを拒否する彼の姿勢を示している。彼の故郷ミシシッピ州オックスフォードはニューオリンズよりももっと片田舎の深南部である。しかしフォークナーはニューオリンズ時代を経て、あくまでもオックスフォードが彼の小説の世界の中心であらねばならない、と気づいたといえよう。²³⁾ ニューオリンズを舞台とする地方色が売り物の作品群は、ニューオリンズが北部やアメリカ全土に対して特殊な周縁であることに意味を見いだそうとして周縁に甘んじている。フォークナーは、ニューオリンズよりさらに周縁である故郷を中心としてニューオリンズはあくまでも周縁として扱わなければ、彼の作品も同じ植民地性から逃れられない、と知ったのである。

ただしフォークナーは、彼の世界で周縁として扱われるべきニューオリンズが重要な意味を持つことは気づいている。『アブサロム、アブサロム！』は彼の最高傑作の一つであるが、ここでニューオリンズは最初、小説の舞台であるヨクナパトファ群の周縁として登場する。ミシシッピの片田舎でピューリタンの道徳で育った登場人物ヘンリーにとって、ニューオリンズからきた友人ボンがかの地にオクトルーン（八分の一黒人の血が混じっている）の妻がありながらヘンリーの妹と結婚しようとするのは問題である。ましてやボンがヘンリーの父サトベンがハイチ時代に最初の妻に産ませた息子で、しかも黒人の血が混じっているのであれば、ヘンリーはボンと妹の結婚を断固阻止しなければならない。父に息子としての承認を求め、白人の南部父権社会の構造を揺るがすボンは、ニューオリンズから来て、しかもそのルーツはカリブ海にさかのぼる。性的放縦と混血人種が喧伝されるニューオリンズは、南部社会の正統を守る保守的なヨクナパトファ群を震撼させる周縁だが、その異端と見える都会は南北戦争以前は南部奴隷制を代表する町でもあった。そこから来たボンがサトベンに息子としての承認を求めることは、異端として周縁に追いやられていた場所が実は、南部社会の構造の原点であり、その父権が抑圧してきた罪や欲望を明らかにする根源としての場所であることを示す。

フォークナーはこの小説でニューオリンズの陳腐な文学的イメージをパロディ的に用いながら、それが使い古されたイメージを越えて南部社会を破壊する力となって戻ってくるようにしむけることに成功している。優雅なオクトルーン女性や、ニューオリンズ育ちのボンの女性的な優美さ、ハイチの黒人たちの反乱、ブドゥー教の呪物などは、文学的ニューオリンズの典型的イメージとしてよく使われるものである。クレオール社会を描いたとして有名なジョージ・ワシントン・ケーブルの『グランディシム一族』でも、元奴隷の混血美人やどこか女性的な混血の自由黒人の悲劇、アフリカの誇りを失わない黒人奴隷の反抗やブドゥー教の呪いなどが使われている。『アブサロム、アブサロム！』でこれらのイメージがパロディに終わらないのは、以上のイメージがサトベン物語が語られている現在、すなわち1910年の時点で、サトベンの荘園建設挫折の謎を探ろうとする語り手によって新たな意味を発見されるからである。最初これらのイメージ群は、南北戦争で南部が負けた真の原因、すなわち南部の罪を明らかにしようとする主人公クエンティンたちにとって、過去へ立ち返るための格好の手がかりとなる。特にクエンティンの友人でカナダ人のシュリーブにとっては、南部は伝説的なイメージに満ちたおもしろい場所ではなかった。しかしサトベンを知る人々が語る、ニューオリンズの陳腐なイメージが織り込まれた話は、若いクエンティンとシュリーブが想像力で語り直す過程で新たにサトベン家の悲劇の原因としてひしひしと迫ってくる。『アブサロム、アブサロム！』でフォークナーは、単に市場で出回る商品となっていたニューオリンズに、本来この場所が持っていた南部の周縁かつ中心という力を回復させる。

エデュアル・グリッサンはその著『フォークナー、ミシシッピ』で、荘園制度、奴隷制、植民地文化、フランスの影響などの点で、ニューオリンズがカリブ植民地との親近性を持つことを指摘している（29）。『アブサロム、アブサロム！』でフォークナーはやはりニューオリンズから

ハイチにさかのぼってサトペンの生涯を追求せずにはいない。ニューオーリンズはフランス領時代、植民地であったサン・ドミンゴ（後のハイチ）の食糧供給基地であった。一方フォークナーが『アブサロム、アブサロム！』を書き始めた1934年は、アメリカが1915年にハイチに軍事介入してから19年間にわたる海兵隊駐留がやっと終わる時である（モリソン336）。そもそもフォークナーが生まれた19世紀末からアメリカ合衆国は、パナマ運河を巡ってやセオドア・ルーズベルトのモンロー主義確認（モリソン300、ブローガン464）に端的に見られるように、中南米やカリブ海諸国に頻繁に干渉している。ハイチでフランス人経営者の農園での黒人暴動を収拾したサトペンの話を書くフォークナーは、執筆当時の帝国主義的アメリカとサン・ドミンゴ時代のフランスとハイチ、および小説中の南部社会と黒人奴隷を、ニューオーリンズを通して重ね合わせて考えることができたはずである。南北戦争直前にニューオーリンズからやってきて黒人の影を背負うボンは、無言のままサトペンの罪を告発するが、フォークナーの執筆当時の南部白人社会もアメリカ合衆国もやはり同様に黒人社会から、または植民地的扱いを受けるカリブ諸国から追求されるべき存在であった。フォークナーは『アブサロム、アブサロム！』で、ニューオーリンズをその陳腐なイメージを越えて彼の小説の中の重要な周縁として展開することに成功している。

フォークナーにとってニューオーリンズは最初、ヨーロッパへの船旅の出発点として、異国情緒に富み開放的でボヘミア生活ができる都会であった。しかし職業的作家として出発するにあたり市場との関係を考えさせる場所となり、さらには資本主義および帝国主義的な合衆国と封建的南部社会を二重写しにできる場になった。ミシシッピの片田舎の住民であるフォークナーは、ニューオーリンズを中心と周縁の両面として見ることで、地方色を越えた文学的空間としてのニューオーリンズの意義をとらえた。

3

フォークナーに14年遅れてやはりミシシッピ州の田舎に生まれ育ったテネシー・ウィリアムズはニューオーリンズを気に入り、1938年以来そこで多くの時を過ごした。監督教会派の牧師であった祖父の影響が強かったミシシッピの幼年時代、またセント・ルイスの無神経で即物的な環境にとけ込めなかった青春時代の反動のように、ニューオーリンズはウィリアムズの深酒、薬、ホモセクシュアルの傾向を急速に助長させ、彼はこの地で自らを縛る道徳からの解放を味わった。彼のニューオーリンズは、『去年の夏突然に』のように上流階級が住むガーデン・ディストリクトを舞台としたものは、上流社会の息苦しさが描かれているケイト・ショパンの『目覚め』に呼応するかのようにその偽善ぶりが暴かれる。それは『欲望という名の電車』のフレンチ・クォーター界限の猥雑なバイタリティと対照的で、その意味ではウィリアムズのニューオーリンズはこの歴史的観光都市の図式的イメージを踏襲して利用している。しかし『欲望という名の電車』は最初はセント・ルイスを舞台にして『ポーカールの夜』という題を持っており、ニューオーリンズの話となって強烈な印象が得られるのは確かである（ホルディッチ74）。それならばニューオーリンズはどのように『欲望という名の電車』に貢献したのか、またこの作品はこの町を地方色を越えることができたのか。以下『欲望という名の電車』で、この街を舞台の中心に据えたウィリアムズの

ニューオリンズを検討する。

『欲望という名の電車』のニューオリンズは、この町の古典的な文学イメージからわずかにずれている。ヒロインのブランチ・デュボワの故郷はミシシッピ州で、彼女の名前や彼女が育った館ベル・レーヴは彼女がフランス系の家系であることを示唆するが、彼女はいわゆるニューオリンズのクレオール社会の人間ではない。また彼女と対立するスタンレー・コワルスキーは黒人でも混血でもないポーランド系移民の出である。またブランチが訪ねてくる妹ステラとスタンレーの家はフレンチ・クォーターのはずれにある。これらの設定はクレオール社会と黒人に代表されるニューオリンズの典型的イメージがさすがに第二次大戦後は旧式すぎるためにこうなった、ともいえる。それでもクレオール社会と新参者のアメリカ人というよく使われた配置は、ブランチの旧南部とスタンレーの新南部の対立として継承され、人種差別意識もブランチが名門意識を捨てず、スタンレーを「ボラック」とポーランド人の蔑称で呼び、社会ダーウィニズム的思考を披露するせりふで明らかである。ウィリアムズは第二次大戦後、それまでのニューオリンズの文学イメージをもとにその変奏を奏でている。

この作品で黒人は劇の筋には直接関与しない。しかし彼らは確かにこの劇で存在し、白人の登場人物たちの抑圧された欲望や恐怖といった感情を増幅させる共鳴箱の役割を果たす。第一場の最初に端役で登場する黒人女性は性的な冗談口をたたいてブランチが抑圧している性をあけすけに扱う。また第九場でブランチは死の床についた親族たちを看病した体験を述べて、病人たちの血や排泄物の始末に黒人の女の子を雇うことさえできなかったと漏らす。スタンレーとブランチの対決場面にはしばしば黒人のプレーヤーが弾く「ブルー・ピアノ」の曲が流れる。第十場では舞台の奥の幻想的なニューオリンズの街角で、売春婦が落としたハンドバッグの中身を黒人女性がくすねようとしている。「欲望」という名の電車に乗って「墓地」行きに乗り換え、「極楽通り」で降りたブランチは、性と死の二者択一的な生活の緊張から精神に異常を来す直前でニューオリンズに逃れてきている。舞台上にはほとんど登場しないがその影が常にある黒人たちは、上品さを取り繕う彼女の意識の中で抑圧されたその二つを思い出させる。^{註4)}

さらに黒人たちと似た役割を果たすのがヒスパニック系人種である。スタンレーの友人の一人、パブロはメキシコ人でポーカーの席で性的な冗談を言っている。またタマリー（挽肉をトウモロコシの粉でくるんだもので中南米料理の一種）売りはニューオリンズの風物詩の一つとして顔を出す。「あつあつ（のタマリー）だよ」という呼び声は食欲と性欲の両方をそそるように聞こえる（第一、二場）。またスタンレーとその仲間がポーカーをしているとき、ブランチはカーテンの仕切りしかない隣の部屋で着替えをしながら電灯の真下に立ち、ラジオをつけてザビア・クガートのルンバを流す（第三場）。そのラテン音楽は彼女の無意識の性欲を表す助けとなる。一方、故郷でのスキャンダルがばれてブランチが追いつめられたとき、メキシコ人の老婆が葬式用の花輪を売りにくる（第九場）。そして彼女は過去の病人の介護経験を思い出すのだ。黒人の場合と同様、ヒスパニック系の人々はこの劇で性と死の両方のイメージを引き受ける。ブランチはミッチの前で気取ってフランス語を使ってみせるが、メキシコ人の老婆が死者のための花輪を勧めると

きのスペイン語は彼女にとって不吉以外の何者でもない。ニューオリンズの歴史の中でスペインは支配階級としての時期があり、町が二度の大火に見舞われたのち再建された建物はスペイン風建築になった。しかしこの作品でのヒスパニックは中南米系の、黒人と同じ下層階級として扱われている。

ブランチは南部名門の家柄のプライドを保とうとする。しかし黒人女中がすべきだ、と彼女が考える病人の世話をし、メキシコ人老婆に動揺する彼女は、自分と黒人やヒスパニック系人種の類似性に密かに気づいている。彼らと同様彼女は困窮し、さげすまれ、さらにメキシコ人老婆の場合は、老化、衰退という意味が加わる。若さと美貌を誇っていたブランチは30歳を過ぎて老化を極端に恐れているが、それとともに優雅な旧南部の衰退も彼女は感じている。新聞の集金に來た青年に彼女が感じる魅力は若さと美貌だが、彼がドラッグストアでチェリーソーダを味わった話を聞くと、ブランチはそこにアメリカの大衆文化の浅薄な若さに対する羨望も感じている。機械工でボーリングチームのリーダーであるスタンレーが代表する近代機械文明の大衆社会に対して、リヒャルト・シュトラウスの『薔薇の騎士』に言及したりジーン・スキンの「ウィーン我が夢の街」の音楽に合わせて踊るブランチが旧世界の人間であることは明らかである。彼女は滅びゆく貴族的文化にしがみつきのながら、その敗残の姿からニューオリンズのヒスパニック系と自分の親近性を感じ取り、また故郷からも追われて黒人と同じ社会の最下層にいる絶望を感じている。

一方スタンレーは、ブランチが彼を旧石器時代の野蛮人とけなすように（第四場）、白人であってもポーランド移民として差別されている。彼の野性的な性的魅力は官能的な黒人音楽の伴奏によって強調されている。それでも第二次大戦で多くの勲章をもらい、もっとも偉大な国の市民であると自慢する（第八場）彼は、仲間のパブロをラテン系人種に対する蔑称と呼び（第十一場）、男性中心主義で女たちを威圧する。彼はルイジアナのデマゴグとして悪名高かった州知事ヒューイ・ロングを引き合いに出しているように（第八場）、新南部のがさつな新興勢力であるが、南部社会伝統の父権主義や人種差別主義を（自分が差別側にまわれる限り）守る。紳士でないために彼は決してブランチに受け入れられないが、彼の権威志向は、愛国主義にせよ男性中心主義にせよ人種差別主義にせよ、旧南部の社会構造を継承している。

このようにブランチもスタンレーもニューオリンズの下層階級との類似性を持ちながら一方で旧南部の階級社会の基本的思想を継承している。最後に抹殺されるのはブランチであるので、旧南部の最上の部分である洗練された感受性、優雅さが否定される暴力的近代社会、という構図はある。しかしブランチは自らの過去を暴露して一見紳士風のミッチの偽善性を暴き、南部女性を神格化してしまう旧南部文化を糾弾する。名門デュボア家の男たちのセックススキャンダルは大目に見られるがブランチのは非難される南部社会のダブルスタンダードは、ブランチが淑女でないなら無理矢理セックスをしても良いと大胆な行動にでるミッチによってより明らかである。さらに精神病院施設から來た医師が、旧南部の紳士の父権主義社会さながらに礼儀正しくブランチを扱うと彼女がおとなしくついてゆく様子からは、社会秩序に順応できない者を排除する旧南部

の冷酷さは近代社会機構に受け継がれていることがわかる。

『欲望という名の電車』のニューオリンズは単に旧南部の没落と新南部の台頭を示すのではなく、性に関するダブルスタンダードや権威主義が過去から継承され、下層階級の存在は変わらない社会である。転落したブランチは黒人やヒスパニックと同じ周縁に追いやられるが、彼女の狂気は旧南部と新南部の両方を告発している。それは確かに19世紀末のニューオリンズの典型的対立の図式の物語性を越えて、現実の社会を批判するものとなっている。しかしブランチの悲劇的な姿は、彼女をそのようにした社会であるニューオリンズを新たに文学的、観光的に有名にしてしまう。ブランチとスタンレーの対立ばかりが脚光を浴びると、ニューオリンズは敗北する優雅さと性的生命力の街としての伝説を再生し、『欲望という名の電車』はますますニューオリンズ宣伝に貢献する。

ウィリアムズはニューオリンズを舞台にしたときにそれは承知していたであろう。彼はニューオリンズのブランチ、ブランチのニューオリンズの強力な市場性を計算していたともいえる。しかし彼はブランチにニューオリンズを通して永遠を見る機会を与えている。ある日、スタンレーのはのめかしを受けて彼女は自分の過去がばれて破滅する時が来るかもしれぬと予感する。過去を隠し上品さを装うのに疲れたその夕刻、ブランチは集金に来た青年に向かってニューオリンズの午後について物憂げに語る。「ニューオリンズの雨模様の長い午後が好きじゃないこと？一時間がただの一時間でなくて両手の中のちょっぴりの永遠で、それをどうしようかって思うのよ」

(Don't you just love these long rainy afternoons in New Orleans when an hour isn't just an hour—but a little bit of Eternity dropped in your hands—and who knows what to do with it? 1830) これは彼女が青年を引き留めるためにだけ思いついたせりふではない。ここでブランチは一時、旧南部の盛衰も性と死のせめぎ合いも越えて、自分がいるこの場が永遠とつながる時間を感じている。それはすべてが自然のあるがままで肯定され是認されるような場である。青年の若さも自分の若さと美貌の衰えもそのまま認められる希有な時間である。一瞬なりとも永遠の中にたゆたう感覚をこのときニューオリンズはくれる。それはニューオリンズに対するウィリアムズの個人的賛辞であり、かつ過去に重く縛られているブランチとニューオリンズをこの地の観光性、歴史的文学的イメージから解放してやる一瞬である。この劇では精神病院送りになる犠牲者としての彼女の姿が南部社会を告発すればするほど、その社会を伝説化したニューオリンズ宣伝に利用されてしまい、彼女が第十一場で叫ぶように「この場所は罠」This place is a trap (1865)になる。「ここからでていきたい」I'm anxious to get out of here (1865)と願う彼女の救いは迎えに来た精神病院の医師ではなく、上記のせりふのニューオリンズの午後のみかもしれない。

ニューオリンズ利用に慎重だったフォークナーと違いウィリアムズは、自己のアウトサイダー性を強烈に意識し、ニューオリンズの特殊性と自らを同定した。しかし南部出身の両者ともニューオリンズの周縁性が周縁のままではすまないことを知っていた。フォークナーは故郷ミシシッピの田舎町からニューオリンズとアメリカ合衆国を照射し、ニューオリンズが南部封建社会

でも帝国主義社会でも中心として機能しえた事実を明らかにし、周縁というニューオリンズの脱神話化を試みた。ウィリアムズはニューオリンズにどっぷり浸かり、その周縁性を引き受ける中で、歴史や伝説や文化的特異性を突き抜けた場所への開放を夢見た。彼らはその試みがたとえ一時成功したにせよ、自らの作品が再びこの町の観光植民地化に貢献してしまうことに気づいていたであろう。フォークナーの『標識塔』のニューオリンズの商業主義やウィリアムズのガーデン・ディストリクトの上流階級のグロテスクさは、この飽くなき観光化現象に対する彼らのいらだちを示している。しかし彼らは南部作家として、南部の一つの典型的あり方を示すニューオリンズの文学空間の可能性にしばしば挑戦せずにはおれなかったのである。

注

¹ホイットマンは彼の全集を編纂し、最初に彼のニューオリンズ滞在を重要視したバック博士に対し、生前に事実を明らかにしたり、神秘化を防ぐような努力を何も行っていない（アレン8）。彼の死後に伝記作者たちがどれほどたくましい想像をするかは知らなかったにせよ、ホイットマン自身、ニューオリンズ行きの神秘化を助長してしまっている。

²アンダソンはすでに1926年4月に編集者ホレス・リブライトに宛てた手紙の中でフォークナーが彼に大変不愉快な思いをさせたので彼のことは関わりたくない、と述べている（もっともそれとは別に、フォークナーが彼の推薦で初の小説を出版できることを喜ぶ、たいそう寛容な一面も同じ手紙で見せているのだが）（ジョーンズ155）。

³田中久男氏はニューオリンズ時代のフォークナーは故郷をでて都会派小説を書く野心を持っていたであろうと論じている（田中86-87）。

⁴トニ・モリスンは『スーラ』で、体裁のいい中流生活を目指すエレーヌが危篤の祖母に会うため、娘を連れて中西部からニューオリンズの極楽通りに戻ってくる場面を書いている（38）。結局彼女は祖母の臨終に間に合わないが、彼女の母はニューオリンズの売春婦で、彼女はずっと避けて生きてきた母に再会する。舌津氏が指摘するように、モリスンは、ここでもちろん『欲望という名の電車』を意識していたであろう（舌津39）。世間体を気にするエレーヌをブランチと同じ場所に行かせることにより（38）、モリスンは白人のヒロインが前に行ったことを黒人女性にたどらせて――もっともエレーヌがそこへ行ったのは1920年11月ということになっていて（31）ブランチより四半世紀以上早い――黒人が白人女性の抑圧された性のシンボルとなるウィリアムズのテクニクが可逆的に皮肉に用いられることを示している。

引用文献

- Allen, Gay Wilson. *The New Walt Whitman Handbook*. New York and London: NewYork UP, 1986.
- Anderson, Sherwood. "A Meeting South." *Sherwood Anderson's Notebook*. New York: Boni & Live-right, 1926. 103-121.
- . "New Orleans, The Double Dealer and the Modern Movement in America." *TheDouble Dealer* 3.15 (1922): 119-126.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. Vol.1. New York: Random, 1974.
- Brogan, Hugh. *The Penguin History of the United States of America*. New York and London:

- Penguin, 1990.
- Bush, Robert. "The Patrician Voice: Grace King." *Literary New Orleans: Essays and Meditations*. Ed. Richard S. Kennedy. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1992. 8-15.
- Fagg, John Edwin. *Cuba, Haiti, and the Dominica Republic*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1965.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. New York: Vintage, 1990.
- . *Mosquitoes*. London: Chatto & Windus, 1964.
- . *New Orleans Sketches*. Intro. Carvel Collins. New Brunswick: Rutgers UP, 1958.
- Glissant, Edouard. *Faulkner, Mississippi*. Trans. Barbara Lewis and Thomas C. Spear. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1996.
- Holditch, W. Kenneth. "South Toward Freedom: Tennessee Williams." Ed. Richard S. Kennedy. *Literary New Orleans: Essays and Meditations*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1992. 61-75.
- James, Henry. *Washington Square. Selected Fictions*. Ed. and intro. Leon Edel. New York: E.P. Dutton. 1953. 80-288.
- . *Hawthorne*. Ithaca: Cornell UP, 1997.
- Jones, Howard Mumford and Walter B. Rideout. Intro. and Notes. *Letters of Sherwood Anderson*. Boston: Little, Brown and Company, 1953.
- Mencken, H.L. "The Sahara of the Bozart." *Prejudices: Second Series*. New York: Alfred Knopf, 1920. 136-54.
- Morrison, Toni. *Sula*. New York: Signet, 1993
- Putzel, Max. *Genius of Place: William Faulkner's Triumphant Beginnings*. Baton Rouge and London: Louisiana State UP, 1985.
- Reynolds, David S. *Walt Whitman's America: A Cultural Biography*. New York: Alfred A. Knopf, 1995.
- Richardson, Thomas. "Local Color in Louisiana." *The History of Southern Literature*. Eds. Louis D. Rubin, Jr. et al. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1985, 199-208.
- Simpson, Lewis P. "New Orleans as a Literary Center: Some Problems." Ed. Richard S. Kennedy. *Literary New Orleans: Essays and Meditations*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1992. 76-88.
- Spratling William and William Faulkner. *Sherwood Anderson and Other Famous Creoles*. Austin and London: U of Texas P, 1967.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin: or, Life among the Lowly*. New York and London: Penguin Books, 1986.
- Williams, Tennessee. *A Streetcar Named Desire*. General Ed. Nina Bayme. *The Norton Anthology of American Literature*. Vol. 2. New York: W.W.Norton, 1998. 1797-1860.
- . *Sweet Bird of Youth, A Streetcar Named Desire, The Glass Menagerie*. London: Penguin, 1972.
- ジョージ・ワシントン・ケーブル『グランディッシュ一族』杉山直人、里内克己 訳、東京：彩流社、1999
- サムエル・モリソン『アメリカの歴史』第4巻 西川正身 訳、東京：集英社文庫、1997
- 舌津智之「欲望という名の越境」渡辺利雄 編『読み直すアメリカ文学』東京：研究社、1996、38-54。
- 田中久男『ウィリアム・フォークナーの世界——自己増殖のタペストリー』東京：南雲堂、1997